

リハビリテーションレジデントマニュアル 第3版

木村彰男 編

里宇明元, 正門由久, 長谷公隆 編集協力

＜書評者＞ 橋本圭司 (国立成育医療センターリハビリテーション科
医長)

評者が医学部を卒業して間もなく、まだ右も左もわからず、しかし志だけは大きく「リハビリテーション医学を極めたい」などと思っていたところに、本書第1版に出会ったことを今でも鮮明に覚えている。

さまざまなリハビリテーション医学関連書籍の中から、真っ先に同書を購入したものだが、同じ病院の研修医の中でも、この貴重なマニュアルを手にしていたのは、ごく一部であったと思われる。しかし、それゆえに、ほかの分野の医師たちとは違うベクトルでの医療の理解・実践に心を躍らせることができたのも事実であった。

あの日から10年以上が経過して、もう1度、第1版を手にとってみると、コンパクトな白いマニュアルの余白には、われながら初々しい書き込みや、表紙の裏にはさまざまな評価スケールの切り

貼りがしてあり、本は手あかで汚れている。

さて、このたびの第3版は、編集の木村彰男先生をはじめ慶應義塾大学リハビリテーション医学教室や関連病院の諸先生方による改訂版である。最近のトピックス(高次脳機能障害やがんのリハビリテーション、転倒予防や廃用予防などの予防的リハビリテーション、社会的リハビリテーションなど)や評価や治療のポイントを、項目ごとに要約形式で見事にまとめられている。評者自身は、まず項目ごとに収載されている「臨床上のコツ」を拝読し、その上で、各執筆者の先生方と、まさに実際に対話をしながら教えをいただいているような感覚で理解を進めることができた。

リハビリテーションは、その解釈によってさまざまな対象をも含むことがあり、一臨床医学として

は、とっつきにくい側面がある。そのような中で、本書は、わが国のこの分野のリーダーたちが、読者に実際に語りかけて下さるような息吹を感じとることができる良書といえよう。

リハビリテーション医療は、机上の勉強だけでは理解できない要素を多面的に意識する必要がある。あまりに高度に情報化された社会において、何がスタンダードで何が先進的なのかといったことを理解する間もなく、次の情報が押し寄せてくる。本書はそのような時代に、われわれリハビリテーション医療にかかわる人間一人ひとりが、何を理解し、どう歩んだらよいのかを、最短ルートで端的に示してくれているように感じた。リハビリテーション医学を志すレジデントのみならず、リハビリテーションチームにかかわるあらゆるスタッフにとって必読・必携の書である。

●B6 変型 頁 544 2010 年
定価 5,250 円
(本体 5,000 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00844-0]
医学書院 刊